

## 9. 向原遺跡<sup>むかいはら</sup>

所在地 武川村黒沢1762-3

調査原因 民間開発

調査期間 1999年4月8日～11月10日

調査面積 1,000m<sup>2</sup>

調査主体 武川村教育委員会

担当者 竹田真人・平山恵一



### 1 立地

向原遺跡は、武川村大字新奥に所在し、北側に東西に流れる黒沢川、南側に同じく東西に流れる小武川に挟まれた台地上の北側の緩斜面上に立地し標高は555mである。

台地上の南側は、昭和34年の台風7号の水害時に、洪水によって大量の土砂が流された被災地に土砂を運ぶために非常に広い範囲の土砂が削平されている。その際多くの遺物が掘り出されたといわれているため、その付近の遺構は全滅であろうと思われる。現在は畑が広がっている。

### 2 経歴

本遺跡は、昭和59年度の村誌編纂事業に先立ち今回の調査区の北西に隣接する区域を調査し、縄文時代中期中葉から後葉にかけての住居が7軒、弥生時代の住居が1軒、平安時代の住居が3軒確認されている。その後、平成6年度には民間開発に先立って試掘調査を行い、集落の存在が確認され平成10年度から発掘調査に入り、今年度も継続して調査を行った。

### 3 遺跡の概要

今年度検出された住居は13軒で、縄文時代中期中葉藤内式期～中期後葉曾利式期にかけてのものである。なお、まだ整理作業を本格的に行っていないため、現段階では状況判断において断定しかねるもの及び、今後訂正されるものが出てくるであろうことをあらかじめ断っておきたい。

1号住居は、9、10号住居と重複関係にあり、住居の正確な形態、柱穴の本数を正確に把握することはできない。炉の高低差により1号住居がその中でもっとも新しいと思われる。炉の形態は地床炉であったが、抜かれている可能性が高い。出土遺物は、井戸尻式期の土器が復元可能なものも含め大量に出土している。1号住居址のそばから土偶の頭部が、覆土上層からはミニチュア土器がそれぞれ出土している。土偶の頭部は床面よりわずかに高い位置で伏せた状態で出土している。他の部位は検出されなかった。

3号住居は、周りに2、5、7、8号住居と重複関係にあり、住居の範囲、柱穴の本数をまだ断定することはできないが、柱穴の数はおそらく5本または6本である。炉の形態は石囲炉であるが、炉の内部からは焼土がほとんど検出されなかった。出土遺物から住居の時期は、曾利Ⅰ～Ⅱ式期に比定されるものと思われる。

4号住居は、6号住居と重複関係にあり、6号住居に切られている。住居の立ち上がりは比較的明瞭であり円形を呈す。柱穴は6本か7本であろう。炉は井囲炉と埋甕炉が隣接して並んでおり、二つの炉を持つ形態をなしている。埋甕炉の内部からは焼土がほとんど検出されなかった。炉体土器や住居内出土遺物から井

戸尻式期に比定される。また、住居内からは土坑も検出されていたが、新旧関係は4号住居よりも新しい。

5号住居は、2、3、6号住居と重複関係にあり、炉の位置もほかの住居よりも高い。そのため住居確認面から炉までの堆積物が薄く、残存状況はあまりよいとはいえない。柱穴は6本と思われる。炉は石囲炉で内部から焼土は検出されなかった。出土遺物も破片のものがほとんどである。時期は曾利Ⅱ式からⅢ式期に比定される。

6号住居は、4号、5号住居と重複関係にある。主柱穴は6本であろうと思われる。炉は検出されず、焼土もほとんど確認することができなかった。出土遺物から、時期は井戸尻式期に比定される。また、住居南の壁際、床面よりわずかに高い位置から、土鈴が完形の状態で出土している。土鈴に文様は施されていない。

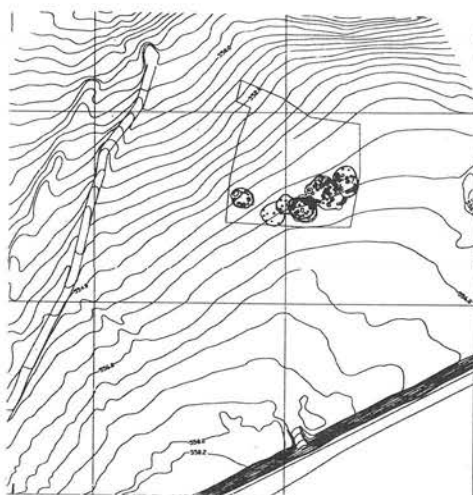
7号住居は、2、3、8、10号住居と重複関係にあり、床面は他の井戸尻式期の住居よりもわずかに高い位置にある。柱穴は5本で埋甕炉であった。炉内に焼土はほとんど認められなかった。

8号住居は、3、7号住居と重複関係にある。柱穴は6本か、7本であろう。炉は、三重に石が囲まれた石囲いの中に埋甕炉をもち、それに切られるような形で、別の埋甕炉が存在する。炉が3号住居の炉と近接していたが、8号住居の炉が3号住居の床面より低い位置にあったため、残存していた。しかし一部7号住居に切られているためか破損している。8号住居の炉体土器は、三重の石囲炉の中に埋められていたものは平井3類A式期の土器であり、それに切られている炉体土器は、藤内式期のものであった。

11号住居は、12号住居と重複関係にある。遺構確認面から、炉までの堆積物が薄く、残存状況はあまり良くない。住居の立ち上がりも明瞭ではない。柱穴は6本を数える。炉は石囲炉である。遺物の出土状況は、破片のものがほとんどであったが、炉の南側に集中している。住居の時期は曾利Ⅲ式期と思われる。

13号住居は、今年度の調査区内で唯一の単独で検出された住居である。炉の付近に貼り床を確認することができた。柱穴は6本か7本と思われる。炉は検出されず、焼土もほとんど確認することができなかった。住居内に土坑が1基検出されたが、13号住居よりも新しい物と思われる。出土遺物から、曾利Ⅰ～Ⅱ式期に比定される。

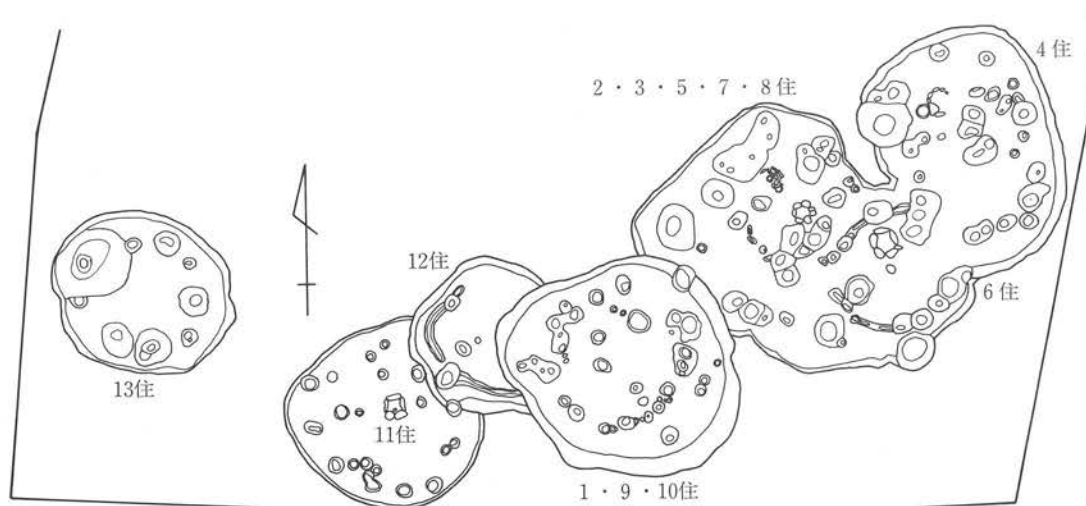
その他向原遺跡からは、縄文時代草創期以前のものと思われる尖頭器や、無文であるが繊維の混入された土器が出土しており、昭和59年度の調査結果を考え合わせると、非常に長期にわたってこの地が利用されていたということをうかがい知ることができる。本遺跡は来年度以降も調査が行われるが、今年度の調査結果から、向原遺跡は縄文時代中期を代表する環状を呈する集落であることが予想される。今後の調査により、向原遺跡の集落の様相が少しずつ明らかになっていくのではないだろうか。そうなれば当時期の研究にとって重要な資料となり得るため、今後の調査結果に期待すると共に、慎重に調査を進めていく必要があるだろう。



向原遺跡調査区 (S=1/2,500)



向原遺跡近景



向原遺跡発掘区住居跡全体図 (S=1/250)



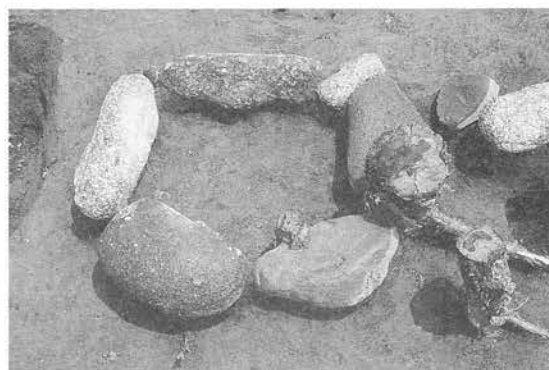
1号住 遺物出土状況



1号住 完掘



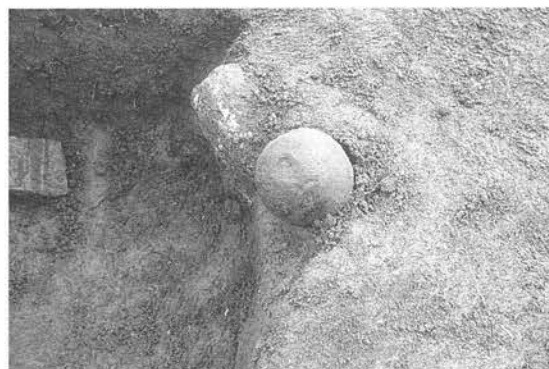
4号住 炉址



5号住 炉址



8号住 炉址



土鈴出土状況